

**外国語学習方略の使用に対して「有効性」、
「コスト」、「好み」の認識が与える影響について**

竹内 理

関西大学

外国語学習方略の使用に対して「有効性」、 「コスト」、「好み」の認識が与える影響について*

竹内 理
関西大学

This article reports on the experiment in which the effects of learners' perceptions of 1) utility (i.e., how effective), 2) cost (i.e., how difficult), and 3) preferences (i.e., how much preferred) were examined on the use of language learning strategies. The subjects of this study were 198 Japanese college students of EFL. 133 of them were English majors, while 65 were non-English majors. Their reported use of strategies were compared and correlated with their perceived utility, cost, and preferences. The results indicate that there exist relations between the use of strategies and the three variables on learners' perception. The relations, however, seem to be moderated by the intervening variables such as learning environment in which learners were placed, and EFL proficiency of learners. Some theoretical and practical implications for strategy training are also mentioned.

キーワード：外国語学習方略 (Language Learning Strategy)、学習者変数 (Learner Variables)、方略訓練 (Strategy Training)、認識 (Perceptions)

1. はじめに

外国語学習方略の研究では、方略の使用に対して多くの変数が影響を与えることが実証的に確かめられている。代表的な変数としては、学習者の性別、外国語学習経験、性格、職業指向、学習スタイル、学習への動機づけ、適性、外国語能力などがあげられるが(Oxford, 1990; Takeuchi, 1990; 竹内, 1999参照)、学習者自身が方略に関してどのような認識(考え方)をもっているか、そしてその認識が方略使用へどのような影響を及ぼすかに関して調査した研究は少ない。竹内(1999)は、343名の英語学習者の協力を得て、学習スタイルの違いにより方略の重要性に対する学習者の認識がどのように変化するかを調査したが、この研究を除けば「学習者の認識」という変数を取り扱った研究は、筆者の知る

かぎり、存在しない。

外国語教育以外の分野(たとえば教育心理学)に目を転じると、「学習者の認識」が方略使用に与える影響について質的・量的に調査した研究がいくつも見受けられる。たとえば、市川(1993)、McCombs(1986)、Nolen(1988)、佐藤(1998)などがその例で、市川はコスト(Cost)の認識、つまり「従前の方略の使用をやめ、別の方略を使用することがどの程度大変であるか」の認識が方略使用に影響することを指摘している。McCombsやNolenは、コストの認識に加え、有効性(Utility; その方略が外国語学習にどれだけ役立つのか)の認識が使用頻度に大きな影響を及ぼすと指摘している。さらに、佐藤は、好きか嫌いかという直感的な好み(Preferences)が影響する可能性もあるとして、有効性、コスト、好みの3変数の影響を実証的に記述している。

本論文は、学習者が持つ方略に対する1)有効性の認識、2)コストの認識、そして3)好みの認識といった変数が、方略使用にどのような影響を与えるかを、外国語教育の分野において実証的に示そうとしたものである。このような学習者の持つ認識という変数の影響が解明されれば、方略訓練(Strategy Training)において、より有効な方法の提案が可能になるほか(e.g., Oxford, et al., 1990)、なぜ学習者によっては方略訓練が上手く行かない場合があるのか(e.g., Cohen, 1998; O'Malley and Chamot, 1990; Oxford, et al., 1990, 竹内, 1998)を解明する手がかりを見いだすことも可能となる¹⁾。

2. 方法

2.1 被験者

本研究の被験者は、英語専攻の大学4回生133名と英語非専攻の大学3回生65名であった。被験者の英語能力を測定するために45項目からなるクローズテストを行い、その結果を比較したところ、表1が示すように両グループの間には統計的にみて有意な差が存在していることがわかった。よって、本研究では、英語専攻グループを上位群(HG)、英語非専攻グループを中位群(MG)と呼ぶことにした。HGはすべて女性であり、MGは男性と女性の混成グループであった。

表1. t検定の結果

グループ	平均	標準偏差	被験者数
英語専攻(HG)	25.519	3.963	133
英語非専攻(MG)	22.092	5.474	65

$t=5.223$ (df=196) $p<.000$

なお、両グループの被験者から、いわゆる帰国子女に属する海外長期滞在者(滞在年数2年以上)は除外された。

2.2 質問紙

学習方略の使用頻度測定に関しては、R. Oxford が開発した *Strategy Inventory for Language Learning*(SILL)のVer. 7 (for ESL/EFL)を使用した(Oxford, 1990)。この質問紙は、学習方略に関する50項目の比較的平易な記述からなっており、被験者は各項目毎に1(利用しない; 0-20%)から5(よく利用する; 80-100%)のスケールで使用頻度を判定していく。この質問紙に関しては、ESL/EFLの環境で詳しく研究がなされており、信頼性が高いことで知られている(e.g., Oxford, 1996; Oxford and Burry-Stock, 1995; Takeuchi, 1999; Takeuchi, et al., 1999; Takeuchi and Wakamoto, forthcoming)。本研究ではこのSILLの日本語翻訳版を使用した。その信頼性も Cronbach Alpha で.91と高いことがわかっている(Takeuchi and Wakamoto, forthcoming)。

有効性、コスト、好みの測定に関しても上記のSILLを用いたが、尺度はそれぞれの変数にあわせて変更した。まず、有効性に関しては1(役立たない; 0%-20%)から5(とても役立つ; 80-100%)とし、コストに関しては1(使用に問題がない; 0%-20%)から5(とても大変である; 80-100%)、好みに関しては1(好きではない; 0%-20%)から5(とても好き; 80-100%)のように設定した。尺度を変更したため、今回の被験者を対象にして、それぞれの尺度で信頼性を測定し直したところ、表2で示すようにすべて $\alpha > .89$ の結果を得た。よって、質問紙の信頼性に関しては問題がないものと判定し、以下に報告する分析をおこなうことにした。

表2. 質問紙の信頼性 (内的一貫性)

尺度	HGの α	MGの α
有効性	.9313	.9606
コスト	.9213	.9206
好み	.9181	.8917

(HG有効性の n=133, HGコスト、好みの n=132, MGの n=65)

2.3 手続き

質問紙は、HG(1クラス)、MG(2クラス)それぞれの授業中に配付され、回答には十分な時間が与えられた。質問紙回収後、研究のために利用することを

被験者に伝え、同意を得た。データは50の項目ごとに数値で入力されたのち、SILLの分類に従ってA-Fの6下位区分ごとに合算された。合算された数値はその下位区分に属する方略数で分割され、平均値化された。なお、分析には *Statistica Ver.5.0J* を使い、i)記述統計、ii)1要因6水準の分散分析、iii)相関(行列)分析の手順を実施した。

方略の下位区分については、Oxford(1990)の分類に従った。これによると、Aは記憶促進法を中心とする記憶方略群、Bは具体的な学習方法・学習行動に関わる認知方略群、Cはコミュニケーションを維持するための代替・補償方略群、Dは学習の計画性、学習環境の整備などに関するメタ認知方略群、Eは不安を減らしリラックスするための感情コントロール方略群、そしてFは母語話者らとのコミュニケーションの中で学習を進めていく対人関係方略群となる(詳しい項目についてはOxford, 1990参照)。

3. 結果

3.1 分散分析の結果

表3aおよび3bは、それぞれHGおよびMGの各尺度における下位区分別平均値を示している。

表3a. HGの下位区分別平均値

条件	A	B	C	D	E	F
頻度	2.820	3.126	3.338	2.973	2.778	2.696
有効性	3.686	4.189	3.880	4.232	3.471	4.313
コスト	2.934	3.063	3.006	3.482	2.859	3.081
好み	2.944	3.270	3.264	3.322	3.046	3.448

(頻度、有効性に関してはn=133; コスト、好みに関してはn=132)

表3b. MGの下位区分別平均値

条件	A	B	C	D	E	F
頻度	2.778	2.811	3.082	2.343	2.475	2.214
有効性	3.534	3.799	3.500	3.584	2.988	3.734
コスト	3.013	3.358	3.341	3.798	3.109	3.418
好み	2.993	3.083	3.050	2.798	2.654	2.925

(n=65)

まず、HGで使用頻度に関して平均値を降順に並べると、C-B-D-A-E-F となった。続いて1要因6水準の分散分析を行った結果、 $F(5,660)=31.50$, $p < .0000$ と

有意な値を得た。そこで、水準のすべての組み合わせに対して*Post-hoc* LSDを行ったところ、A-E, E-Fの差を除くすべてにおいて $p = .05$ 以下の確率で有意な差があることがわかった。最も使用頻度が高い方略群は、Cの代替・補償方略群、続いてBの認知方略群、Dのメタ認知方略群となった。MGでも同様の分析を行ったところ、C-B-A-E-D-Fとなり、分散分析では $F(5,330)=25.59, p < .0000$ と有意な値を得た。そこで水準のすべての組み合わせに対して*Post-hoc* LSDを行ったところ、B-A, E-DおよびD-Fの差を除くすべての差において、 $p = .005$ 以下の確率で有意な差があることがわかった。ここでも、HG同様に代替・補償方略群の使用頻度が最も高く、対人関係方略群の使用頻度が最も低くなった。なお、HGとMGの比較を行ったところ、Dのメタ認知方略群の使用頻度がMGでは低いこともわかった。

次に、有効性に関してHGの方略群の平均値を降順にならべたところ、F-D-B-C-A-Eとなった。これに対して1要因6水準の分散分析を行ったところ、 $F(5,660)=99, p < .0000$ と有意な値を得たため、すべての水準の組み合わせに対して*Post-hoc* LSDを行った。その結果、F-D, D-Bの差を除く残りすべてが $p = .01$ 以下の有意な差であることがわかった。同様にMGで分析を行ったところ、平均値の降順はB-F-D-A-C-Eとなり、分散分析の結果は $F(5,330)=25.20, p < .0000$ となった。そこで、同じく水準のすべての組み合わせに対して*Post-hoc* LSDを行ったところ、B-F, F-D, D-A, D-C, D-E, A-Cの差を除くすべてにおいて、 $p = .05$ 以下の有意な差が検出された。上記の結果で注目に値するのは、HG, MG両群の被験者から使用頻度では最も低いとされたFの対人関係方略群が、有効性ではきわめて高いと認識されている点であろう。これ以外にも、使用頻度ではHG, MG両群においてトップであったCの代替・補償方略群が、有効性の認識では低めに見積もられている点も興味を引く。

コストに関しても、HG, MGで、それぞれで平均値を降順で並べたところ、HGではD-F-B-C-A-E、MGではD-F-B-C-E-Aとほぼ同様の順位が得られた。分散分析の結果もそれぞれ $F(5,655)=21.11, p < .0000$ 、 $F(5,330)=18.29, p < .0000$ と有意な値となったため、水準のすべての組み合わせに対して*Post-hoc* LSDを行ったところ、HGではF-B, F-C, B-C, B-A, B-E, C-A, C-E, A-Eの差以外で $p = .01$ 以下の有意な差が検出された。また、MGでもF-B, F-C, B-C, E-Aを除く差で $p = .05$ 以下の有意な差が検出された。この結果は、学習者がDのメタ認知方略群やFの対人関係方略群のように自ら環境や人間(母語話者など)に働きかけて学習を推し進めて

いく方略群の使用を「大変である」と認識していることを表しており、上述の有効性の認識に関する分析と合わせると、メタ認知や対人関係方略群は「有効であるが使用が大変なもの」と考えられている状況が浮かび上がってくる。

好みに関しては、平均値の降順で、HG の場合F-D-B-C-E-A、MGの場合B-C-A-F-D-Eとなった。分散分析の結果は $F(5,655)=17.97, p < .0000$ および $F(5,330)=7.73, p < .0000$ であったため、水準のすべての組み合わせに対してPost-hoc LSDを行ったところ、HGではD-B, D-C, B-C, E-Aの差を除けば残りの差が $p = .05$ 以下の確率で有意であることがわかった。一方、MGではB-C, B-A, B-F, C-A, C-F, A-F, F-D, D-Eの差を除けば残りの差が $p = .05$ 以下の確率で有意であることもわかった。平均値の配列はHGとMGでは異なるが、図1a、1bよりそのパターンの違いが主にAの記憶方略群(HG<MG)、Dのメタ認知方略群(HG>MG)、そしてFの対人関係方略群(HG>MG)に起因していることがわかる。なお、使用頻度の分散分析で、Aの記憶方略群の頻度はHG<MG、Dのメタ認知方略群の頻度はHG>MG、Fの対人関係方略群の頻度はHG>MGとなる傾向が示されているが、図1a、1bと重ね合わせると、この頻度の違いが「好み」に起因している可能性があることもわかる。ただし、Fの対人関係方略に関しては、EFL環境の制約から利用できる場面が少ない方略も多く含まれており、このため好みの高さが直接的には頻度の高さに反映されず、HG、MGともに頻度が最も低くなったものと考えられる。

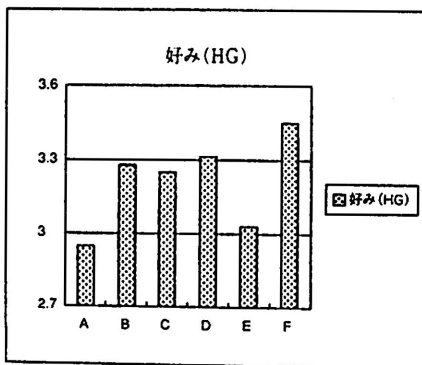


図1a. 学習方略群と好み(HG)

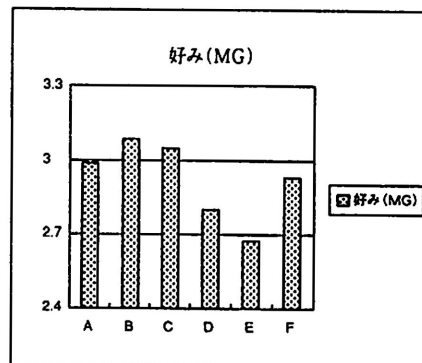


図1b. 学習方略群と好み(MG)

3.2 相関分析の結果

以上の分析より、学習方略の使用頻度と有効性の認識、コストの認識、および好みの認識の間に関係があることが示されたため、相関分析を用いてさらに変数間の関係を調べてみることにした。

表4は、使用頻度と有効性認識の関係で最も高い有意な相関を示した方略群の組み合わせをまとめたものである。これによると、HG、MGともにFの対人関係方略群を除くと、その方略群の有効性の認識が高ければ、使用頻度も上昇する対応関係が読み取れる²⁾。Fの対人関係方略に関しては、3.1の分散分析で見たように、使用頻度と有効性の認識に最も大きな乖離があり、これが影響して対応関係が見いだせないものと考えられる。

表4. 使用頻度と有効性認識の関係 (相関係数)

HG		MG	
	<i>r</i>		<i>r</i>
頻度A-有効性A	.47	頻度A-有効性A	.56
頻度B-有効性B	.34	頻度B-有効性B	.51
頻度C-有効性C	.34	頻度C-有効性C	.34
頻度D-有効性D	.34	頻度D-有効性D	.34
頻度E-有効性E	.28	頻度E-有効性E	.39
頻度F-有効性D	.25	頻度F-有効性E	.32

すべて $p = .05$ 以下で有意 HGの $n=133$, MGの $n=65$

表5は、使用頻度とコスト認識の関係で最も高い有意な相関を示した方略群の組み合わせをまとめたものである。これによると、すべての組み合わせが負の相関を示しており、「方略のコストが高い」と学習者が考えた場合、使用頻度を低下させてしまう対応関係が読み取れる。組み合わせを詳しくみていくと、HGではEの感情コントロール方略群を除けば、その方略群のコストの認識が高くなれば使用頻度も低下する。MGでも、Bの認知方略群とCの代替・補償方略群を除くと、その方略群のコスト認識が高くなれば、使用頻度も低下する。なお、HGのE、MGのB、Cの頻度は別の方略群のコスト認識と最も高い有意な相関をしめしているが、この非対応性、ならびにHGとMGでの対応関係の違いについては、現在のところ理由が明らかではない。ただし、HGとMGを比較すると英語能力の違いが影響した可能性も考えられることから、今後さらに深く調査する必要がある。

表5. 使用頻度とコスト認識の関係 (相関係数)

HG	r	MG	r
頻度A-コストA	-.29	頻度A-コストA	-.33
頻度B-コストB	-.28	頻度B-コストA	-.34
頻度C-コストC	-.28	頻度C-コストB	-.29
頻度D-コストD	-.32	頻度D-コストD	-.27
頻度E-コストD	-.23	頻度E-コストE	-.30
頻度F-コストF	-.28	頻度F-コストF	-.49

すべて $p=.05$ 以下で有意 HGの $n=132$, MGの $n=65$

表6は、使用頻度と好みの認識の関係で最も高い有意な相関を示した方略群の組み合わせをまとめたものである。これによると、すべての下位区分においてその方略群の好みが上昇すれば、使用頻度も上昇する対応関係が認められる。なお、HGにおいて、Fの対人関係方略群だけがDのメタ方略群の好みとも関係し

表6. 使用頻度と好みの認識の関係 (相関係数)

HG	r	MG	r
頻度A-好みA	.66	頻度A-好みA	.65
頻度B-好みB	.57	頻度B-好みB	.59
頻度C-好みC	.52	頻度C-好みC	.57
頻度D-好みD	.59	頻度D-好みD	.65
頻度E-好みE	.47	頻度E-好みE	.53
頻度F-好みD/F	.47	頻度F-好みF	.55

すべて $p=.05$ 以下で有意 HGの $n=132$, MGの $n=65$

ていたが、これは学習環境を整え計画的に学習することを好む被験者が、対人関係方略を使う場面を多く作り出しているためと考えられる。

4. 考察

相関分析では、使用頻度と有効性の認識の間に弱いながらも有意な相関が認められた。つまり、これは学習者から有効と認識される方略群は、その使用頻度も上昇するという対応関係が存在していることを意味する。しかし、一方で分散分析の結果は、使用頻度は低いが無効性の認識は高い方略群(Fの対人関係)や、使用頻度は高いが無効性の認識は低い方略群(Cの代償・補償)の存在を示し

ており、使用頻度と有効性の関係はそれほど単純なものではないことがわかる。筆者は、両者の関係を探る際に特に考慮に入れるべきは、学習者の置かれている環境である。たとえばFの対人関係方略群などは、EFL教室環境下では利用しにくい方略も多く含まれており、このため有効と認識しながら実際には利用できない状況が生じている可能性もある。使用に適切な環境を提供すれば有効性が高いと認識されている方略の使用頻度は上昇するのか、それともコスト意識(Fは高いことに注意)に影響されて使用頻度は上昇しないのか、この点について、今後さらに調査していく必要がある。

コストに関しては、学習者がコストが高いと認識した場合は使用頻度が下がる傾向にあることが相関分析からわかった。一方、分散分析の結果をあわせると、コストは高いが有効であると被験者が考えている方略群(Dのメタ認知、Fの対人関係)が存在していることもわかった。このような高コストながら有効と学習者が判断する方略群に的を絞り、その使用頻度を上昇させていく手法が提示できれば、研究者の注目を集めている方略訓練の可能性が一段と広がるものと考えられる(e.g., Ayaduray and Jacobs, 1997; Cohen, 1998; Oxford, et al., 1990; 竹内, 1998)。1つの方法として、筆者は英語学習成功者が書いた学習記録を編集して提示し、実感しにくい有効性を学習者に認識させ、コストに勝る効果があることを示す手法を導入している。しかし、この方法が実際の使用頻度上昇につながるかどうかは、今後の検討を待たねばならない。

好みの認識に関しては、相関分析の結果から、好みが強ければそれだけ使用頻度も上昇することが判っており、3.1で述べた分散分析におけるHGとMGの使用頻度の違い(A、D、F)は、この好みの違いに起因しているものと解釈することができる。ただし、Fの対人関係方略群のように、被験者から好まれていているにもかかわらずその使用頻度が上昇していないものがある。これは対人関係方略群がEFL教室環境下では利用しにくい方略を含む群であるために、好きと認識しながらも実際には使用することができず、このため使用頻度が低下するのであろう。有効性の認識と同様、この場合も、使用に適切な環境を整えることで使用頻度が上昇するのか、今後さらに調べていく必要がある。なお、Cohen(1998)やChamot and O'Malley(1987)らの研究者達は、メタ認知方略群の使用が外国語能力の向上と強く関係していると主張しているが、英語能力がより高いHGの被験者がこのメタ認知方略を好み、より多く使用しているということは、彼らの主張に対する間接的な裏付けになるものと言えよう。

5. おわりに

今回の研究では、英語能力の異なる2群の被験者に参加を求めたが、予想していたほどは能力差の影響が現われてこなかった。これは、両群の英語力の差が、有意ながら平均点で3.5点と小さかったことに起因しているのかもしれない。今後、能力差の大きなグループ間で今回の結果を追試していく必要があるだろう。また、HGはすべて女性であり、MGは男女混成のグループであったことや、HGが英語専攻であり、MGが英語非専攻であったことも結果に幾分かの影響をおよぼしたものと考えられる。

上述のような限界を考慮にいたした上で、今回の研究から主張できることをまとめると、以下ようになる：1)学習方略の使用頻度と有効性の認識、コストの認識、好みの認識の間には関係がある；ただし、2)これらの関係は学習者が置かれている学習環境や学習者の外国語能力に影響されて変化する可能性もある；3)関係が認められた以上、有効性、コスト、好みの認識の変数に関しても、その他の学習者変数(たとえば性別、学習スタイルなど)と同じように影響を考慮に入れて、学習方略訓練の具体的方法を策定すべきであろう³⁾。

[注]

* 本論文のデータ整理・入力などに際して、澤武潤子氏の協力を得た。ここに記して感謝したい。

1. 方略訓練に関しては、竹内(1998)に詳しい。
2. 3.2の分析は相関分析のため因果関係は主張していないことに注意。
3. たとえば、コスト認識を低下させるための活動や有効性を体感させる活動(本論文4.参照)を方略訓練の過程に導入することが考えられる。

参考文献

- Ayaduray, J and Jacobs, G.M 1997. Can learner strategy instruction succeed?: The case of higher order questions and elaborated responses. *System*, 25(4) , 561-570
- Cohen, A.D. 1998. *Strategies in learning and using a second language*. London: Longman.
- 市川伸一 1993.「数学的な考え方」をめぐる相談・指導 市川伸一(編)『学習を支える認知カウンセリング：心理学と教育の新たな接点』東京：ブレー

ン出版

- McCombs, B.L. 1988. Motivational skills training: combining metacognitive, cognitive, and affective learning strategies. In Weinstein, C.E., E.T. Goetz, and Alexander, P.A. (eds.) *Learning and study strategies: Issues in assessment, instruction, and evaluation*. New York: Academic Press.
- Nolen, S.B. 1988. Reasons for studying: Motivational orientations and study strategies. *Cognition and Instruction*, 82, 71-80.
- O'Malley, J.M. and Chamot, A. 1990. *Learning strategies in second language acquisition*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Oxford, R. 1990. *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House & Harper Collins.
- Oxford, R. 1996. Employing a questionnaire to assess the use of language learning strategy. *Applied Language Learning*, 7(1&2), 25-45.
- Oxford, R. and Burry-Stock, J.A. 1995. Assessing the use of language learning strategies worldwide with the ESL/EFL version of the strategy inventory for language learning (SILL). *System*, 23(1), 1-23.
- Oxford, R. Crookall, D., Cohen, A., Lavine, R., Nyikos, M, and Sutter, W. 1990. Strategy training for language learners: Six situational case studies and a training model. *Foreign Language Annals*, 22(3), 197-216.
- 佐藤 純 1998. 学習方略の有効性の認知・コストの認知・好みが学習方略の使用に及ぼす影響 『教育心理学研究』, 46, 367-376.
- Takeuchi, O. 1990. Language learning strategies in second and foreign language acquisition. *Bulletin of the Institute for Interdisciplinary Studies of Culture*, 8, 64-83.
- 竹内 理 1998. 海外研修プログラムがStrategy 使用に及ぼす影響につてStrategy Training の観点から 有本純、他(編)『ことばの心理と学習：河野守夫先生退職記念論文集』東京：金星堂
- 竹内 理 1999. 学習スタイルと外国語学習方略：実証的研究をもとにして『関西大学視聴覚教育』, 22, 1-19.
- Takeuchi, O., Mine, H., Yoshida, H., and Yoshida, S. 1999. Toward the establishment of the country-by-country SILL norms. *Language Laboratory*, 36, 51-62.
- Takeuchi, O. and N. Wakamoto, In press. Language learning strategies used by Japanese college learners of English: A synthesis of four empirical studies *Language Education and Technology*, 38.